

2020. 10. 11. 聖霊降臨節第20主日礼拝式説教

ルカ福音書講解説教

聖書：ルカによる福音書14章7-14節

『神によって招かれる』

今朝の聖書箇所を最初にさっと読んだときに、ここには「謙遜のすすめ」とか、「自分を低くする作法」のようなものが語られているのか、と思われた方もおられるかもしれません。婚宴の席に招かれたら、上席についてはならない。あなたより身分の高い人が招かれていたら、(身分の高いと訳されている言葉は名誉の高いというのが元の言葉です) 招いた人から「この方に席を譲ってください」と言われるかもしれない。その時あなたは恥をかって末席につくことになる。むしろ招待を受けたら、末席に座りなさい。そうすると、招いた人が「さあ、もっと上席にお座りください」ということになるだろう、ということです。

この時代の婚宴では、座る席が決まっていない、ということがしばしばあったのでしょう。現在の日本でも、ちょっとした会食の場でも、誰がどこに座るか、ということで落ち着かない時間を過ごす、ということは普通にあることです。そこでいろんなものが見え隠れするのです。この話とは逆に、遠慮しあって、上座に座ろうとしない、というケースはよくあることです。

しかし、この話では末席のほうに座っていたら、招いた人がやってきて、もっと上席に座ってください、ということになるだろう、そう言うのです。そうすると、これは単純に謙遜のすすめなどではなく、むしろ上席に最終的に座るための見せかけの謙遜、という少し厄介な話、ということにもなりかねません。

後半のほうの話は、少し違います。食事の会、宴会を催すときには、友人、兄弟、親類、近所の金持ちを呼ぶな、ということです。その者たちはお返しをするからだ。宴会を催すときには、むしろ貧しい人、体の不自由な人、障がいのある人を招きなさい。その人たちはお返しができないからだ、ということです。実際当時は今以上にお返しで客を呼ぶということがあったようです。貧しい人や、体の不自由な人というのは、その時代において、経済的には最も厳しい人たちです。つまりお返ししたくてもお返しできない人たちです。その人たちが

招きなさい、というのです。確かにこの話自体は謙ることとはつながっています。しかし、やはり最後のところで、そうすれば、正しい者たちが復活する時、つまり終末の時には、あなたは報われる、とあって、最終的にはこちらのほうがいいんだ、となっています。

話の内容それ自体はわかるけれど、主イエスはこの話で何がお語りになりたかっただろうか。「謙遜のすすめ」や、礼儀作法、謙遜や低くなること、という名のゲームの最終勝利者といった話がしたかったのでしょうか。

今日の聖書箇所を読むうえで重要なカギとなる言葉があります。それは7節の「彼らにたとえを話された」という言葉です。今日の主の言葉は「たとえ」なのだ、ということです。ここで主イエスが語られたのは、単なるお話なのではなく、「たとえ」なのだとなぜわざわざ書き記しているのです。

「たとえ」は普通には、あることをわかりやすく説明するために用いるものですが、主イエスにとって「たとえ」はそのようなものでなく、むしろ「たとえ」を用いることで、聞いている者があれこれ考えて、揺さぶられ、覚醒されていくためのものなのです。だから「たとえ」を聞くことで初めのうちはかえってわかりにくくなることもあります。「たとえ」の多くは神の国の「たとえ」です。そうすると神の国自体がわたしたちの常識や日常の経験に収まりきり得るものではないので、「たとえ」そのものにも異和感や、常ならぬ部分や、極端な部分が出てくるのです。つまりその異和感、異常、極端な部分に揺さぶられ、あれこれ思い、「たとえ」が指し示すものを受け止める、ということになっていくのです。

さて。今日の聖書箇所の二つの話は共に「たとえ」です。つまり何かを指し示している、何かを物語ろうとしている「たとえ」なのです。たんに謙遜のすすめであるならば、たとえで語る必要はないのです。むしろここで、主は、謙遜といったようなこととは全く違うことを語ろうとされた。だから「たとえ」なのです。

最初の話は、上席を選ぶのではなく、末席に座りなさい、するとその家の主人が、もっと上席に進んでください、という話でした。だから、最初から上席なのではなく謙って末席に、という謙遜の話だと受け取る人がいる。しかしこ

ここには神の国を指し示す、何か大事なことがある。

わたしたちは、いつでも横並びの中で、自分のポジションはどのへんだ、と意識しているかもしれない。あの人よりは自分のほうがましだとか、あの方は自分より上だとか。しかもそれはもともと相対的なものだから、絶えず変化する。会社での位置づけとか、学歴だとか、キャリアとか、経験だとか。そしてこの辺が自分の座場所だと、自分で決める。

しかしそもそもあなたの席はあなたが決めるものではない。あなたを招いた主人が決めることだ。そうだとすれば、あなたの座るべき場所はあなたをこの人生に招いた神がお決めになることで、あなた自身が勝手に選ぶべきものでも、自分はここでしかないとか、この程度だとか、自己判断するものでもないのだ、というメッセージがここには込められているのです。あなたの座るべき場所は神がお決めになるのだから、あなたは与えられた今を横並びで比べて一喜一憂するのではなく、精いっぱい自分を生きればよい。場所は神がお決めになること。

12 節から話も、同じように神の国のたとえとして我々は聞くのです。もともとの話はずいぶん変な話です。自分のごく親しい人たちを呼ばずに、何のお返しもできない人たちを招きなさい、というのですから。

しかし、考えてみてください。わたしたちは、神に招かれて、活かされているのですが、そもそもわたしたちは神の招きに対してお返しができるような存在なのでしょうか。神がわたしたちを愛して、恵み導き、一人一人を招いてくださる、それに対してふさわしいお返しができるのでしょうか。十分なお返しなどできない、それが神に招かれたものとしてのわたしの姿です。しかし、それでいい、というのが神の招きです。そもそもふさわしいお返しを期待して、わたしをこの世界に招いてくださったわけではない。何のお返しも期待せず、ただわたしを愛して招いてくださった神がおられるから、今わたしがこうしてあるのです。

このたとえは招く側の視点で語られているのですが、このたとえを読む者を、そもそもあなたがどのように招かれているか考えてみるがいい、という具合に招いてくださっている側の視点へと移動させるたとえなのです。

最初のたとえも同様です。自分がどこに座るか、という「自分」に視点があるようであり、大事なことはあなたを招いた主人があなたの場所を決めるということだ、と招いてくださっている主人に視点を移動させるのです。

わたしたちは生きていく中で、しばしば本末転倒のようなことを繰り返していきます。自分で自分の席を決めていくような錯誤。あやまち、まちがい。自分で自分の席などない、と決めつけて不安になるような錯誤。自分を過大評価して、上席に座れると思いついていく錯誤。すべての自分なのです。自分で決めるのです。神のこゝろを持ち出してきても、結局それは自分の理屈のために自分のいいように利用しているだけで、つまりは自分。しかし、この二つのたとえば、その自分に拘束されている自分が、招いてくださっている主人に心を向ける、ということを目指しているのです。神がこのお返しもできないようなわたしを喜んで招いてくださり、わたしの生きるべき場所、座るべき場所、それを用意してくださるのです。

そのことに魂の視線を向ける。そして感謝して、受ける。それがわたしたちの信仰です。自分の生きる意味などあるのか、そう考える日もわたしたちにはあるでしょう。ここで主イエスが挙げている、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人、重いものを抱えている人、これらの人々はことのほか重い荷物を背負わされて、自分は招かれているのか、居場所はあるのか、と問いかけていた人たちだったのではないのでしょうか。

しかし主イエスは、神の招きを語ります。神はあなたを招き、あなたの場所を定めてくださる。誰であっても、どんなものであっても、神は招いてくださる。その事実を目を向けなさい。その事実を感謝して受けて生きなさい、と呼びかけてくださる。自分から目を上げて、神の招きという事実を心から受けとめて、感謝して、今日一日を歩んでいくことが求められています。